

生きる

やまゆり

軽く傷がついた、手の甲をながめて少し落ち着く。爪で強く押すのだ。すごく迷惑な癖だが、そうしないと、たまにわたしは生きてはいけない。なぜか。まず追いかけてくるむかしのわたしの残像を振り切らなければいけないということ、そののちやってくる負の空気、すなわち自分の吸う空気がすべて負になってしまうからだということ、からだ中に負が蔓延する、そうしてところがブラックホールになってわたしの肉体がそれに吸い込まれる勢い、そういった救いようのない状態におちいるときです。わたしは左手の甲を爪で思いっきり押す。まだこの世に居たい気持ちをそれにぶつけるように、血がにじむくらい押しまくる。ブラックホールの引力と、手の甲の痛みが3対7くらいになったら、わたしの存在が確立されてくる、ああまた命拾いをした。よかった。手の甲はわたしの生きたいという証みたいなものである。

こんなに生きたいのに、こういった一連の危機は2週間に一回くらいと、何気に頻度は高い。なんでかな、と思うと実は思いつくことがなくはなかったりする。たぶんだけれど、わたしの愛すべき人間たちが、わたしをないがしろにした時なんかがあやしい。わたしは愛すべきということは、言葉のとおりただのすべきことだと認識していて、すべきことというのは自分の意思で、別にしなくてもいいことであるともとれるわけで、でも生真面目なわたしはだいたい、愛すべきことはすべきと思っている。思い過ぎている。

例えば自分のまわりの数名でも、愛すべき人間を愛して居ない人間をみると、わたしは吐き気がして、下等だと思う。外道だと思う。家に帰って思いかえすと、怒りがふつふつと込み上げてくる。自由な感情というのは、わたしのあたまには無く、愛すべきは、人間であろう。それが平和であり、正しくあり、しあわせなことに決まっているのに、あの子がわたしを、いまだに無視し続けるのはいかななものかと、理解に苦しむ。

あの子は所謂気分屋で、愛したかと思えば突き放すことにおいての名人だ。どうしても付き合い方が分からず、でも愛することをやめることもできず、不器用に話しかけ続けると、なめられた。一方的に愛想を尽かされた。恐ろしいことだ。理解ができずに悩んだ。ある日、部屋でひとり考えて居たら、先ほどの一連の流れに襲われたのだった。

わたしは間違えているんだろうか。でもこうでしか生きていけないんだなあ。と、手の甲を見つめた。

それでもそうやって生きていくのがわたしなんだろうなあ。どんなに負にまみれても、わたしは手の甲の傷に生きたいという証を残し続けるのだろう。